

第23回白壁賞は蔵原晃一氏ら 「狭窄を来す小腸疾患の診断—X線診断の立場から」 第42回村上記念「胃と腸」賞は前畠裕司氏ら 「家族性大腸腺腫症に伴う十二指腸腺腫の取り扱い」が受賞

2017年9月20日(水)、東京の笹川記念会館で開かれた早期胃癌研究会の席上にて、第23回白壁賞と第42回村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。第23回白壁賞は、蔵原晃一氏(松山赤十字病院胃腸センター)らが発表した「狭窄を来す小腸疾患の診断—X線診断の立場から」(「胃と腸」51巻13号:1661-1674頁)、第42回村上記念「胃と腸」賞は、前畠裕司氏(九州大学大学院医学研究院病態機能内科学)らが発表した「家族性大腸腺腫症に伴う十二指腸腺腫の取り扱い」(51巻12号:1593-1601頁)が受賞した。



▲ 第23回白壁賞を受賞した蔵原晃一氏



▲ 第42回村上記念「胃と腸」賞を受賞した前畠裕司氏

第23回白壁賞

白壁賞の受賞者代表として蔵原晃一氏(松山赤十字病院胃腸センター)が紹介され、「胃と腸」編集委員長の鶴田修氏(久留米大学病院消化器病センター)より祝辞とともに、賞状と楯が贈呈された。

白壁賞は、故白壁彦夫氏の業績を讃え、「消化管の形態・診断学の進歩と普及に寄与した論文」に贈られ、「胃と腸」51巻に掲載された論文に加え、応募論文も選考対象となる。

今回の受賞論文は、蔵原氏らが診断の確定した自験小腸症例の中で、管腔狭窄を合併した症例を抽出し、X線造影所見、内視鏡所見と切除標本肉眼所見を遡及的に検討したものである。症例を最終診断から炎症性疾患と腫瘍性疾患に分類して、各疾患のX線学的特徴と鑑別診断を概説した。

小腸狭窄合併例に対する内視鏡的アプローチには限界があり、その全体像の把握や質的診断には小腸X線造影検査

の併用が有用である。小腸狭窄を来した炎症性疾患の鑑別診断には、①狭窄部の形態の分類、②狭窄と腸間膜の位置関係、③狭窄部周囲の随伴所見の解析が有用である。一方、腫瘍性疾患の鑑別診断には、①狭窄部の両端のoverhanging edgeの有無、②粘膜下腫瘍様所見の有無、③壁伸展不良所見の程度、④管外性発育傾向の有無、などの解析が重要であるとしている。

受賞者挨拶で蔵原氏は、「本稿は、洲上忠彦先生と岩下明德先生に由来する当科の形態診断学の歴史に連なるものであり、改めて両先生に敬意を表しますとともに、症例蓄積に貢献いただきましたOBの先生方、スタッフの皆さまに心より感謝いたします。また、九州大学病態機能内科学教室在籍時よりご指導いただいております松本主之先生に深く感謝いたします。このたびの受賞は、もっと頑張れという激励として受けとめております。今後も一例、一例丁寧な診療を心掛け、本研究会と「胃と腸」誌を通じまして形態診断学の発展に貢献でき

たらと考えております”と述べた。

第42回村上記念「胃と腸」賞

続いて、村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。受賞者代表として前畠裕司氏(九州大学大学院医学研究院病態機能内科学)が紹介された後、鶴田氏より賞状と楯が贈られた。

村上記念「胃と腸」賞は、故村上忠重氏の業績を讃え、“消化器、特に消化管疾患の病態解明に寄与した論文”に贈られる賞で、「胃と腸」51巻に掲載された全論文が選考対象となった。

今回の受賞論文は、十二指腸病変の経過が追えた家族性大腸腺腫症40例を対象に、乳頭部腺腫と非乳頭部の十二指腸腺腫症の内視鏡所見および病理組織像の経時的推移(中央値12.7年)を検討したものである。初回検査において31例の乳頭部腺腫が確認された。最終観察時まで乳頭部腺腫を新たに2例で認め、6例で乳頭部の形態変化が出現したが、病理組織学的にはいずれも中等度異型の管状腺腫であった。一方、十二指腸腺腫症は初回検査時において全例陽性で、大部分は多発する褪色调の小隆起ないし陥凹性病変として認識された。最終観察時にまでに6例がSpigelman分類Stage IVに分類されたが、病理組織学的には高度異型腺腫を1例に認めるのみで、腺癌の出現はなかった。以上より、本症の十

二指腸病変の進行は緩徐であり、癌化もまれと考えられた。

受賞者挨拶で前畠氏は、“まずは本論文を執筆するに当たり直接ご指導をいただきました松本主之先生、江崎幹宏先生に深く感謝を申し上げます。本研究では、九州大学大学院病態機能内科学消化器研究室の諸先生方が家族性大腸腺腫症(familial adenomatous polyposis ; FAP)患者さんに対し、長年かけて内視鏡所見、病理診断所見を確認してきました。まさに研究室の伝統を肌で感じながら行った研究であり、その症例を集積することでこのような結果を得ることができました。今回の受賞は、研究室の一例、一例を大事にする伝統とその成果を評価していただけたものであり、今までのFAP患者さんの診療、検査に携わってこられた多くの先生方のおかげであるとも考えております。今後もこの栄誉を胸に患者さん一人、一人に対して真摯に診療に取り組みたいと思います”と述べ、挨拶を終えた。

最後に、両賞の受賞者に改めて会場から賞賛の拍手が送られ、授賞式は終了した。

なお、本年度をもちまして白壁賞、村上記念「胃と腸」賞は統合され、来年度より「胃と腸」賞として新たに発足いたします。